

児童研だより

2019年3月 No.60



発行：聖徳大学 〒271-8555 千葉県松戸市岩瀬550 TEL.047-365-1111 編集：聖徳大学児童学研究所

CONTENTS

児童学について考える



学びの共同体

～昔はみんな子どもだった、だからすべての人が繋がれる～

連載第4弾：学びの共同体としてアートパークを企画し、学生と地域の連携を目指す児童学部長に話を伺います。



子どもをタバコから守る法律

～未成年者喫煙禁止法と受動喫煙防止～

タバコ規制後進国とされてきた日本で、やっと世界水準の法的なタバコ規制が始まろうとしています。

原田 正平



集団あそび中における視線の動きについて

～3歳以上児を対象に～

遊びにおける他児との会話と視線の動きを捉え、保育者への面接と園児の観察をもとに、園児の社会性の発達について考察します。

活動レポート

第54回聖徳祭 児童学研究所・保健センター合同企画

お勤めの児童書などの展示や子どもから大人までの健康増進～児童学専門家のアドバイス(健康相談)を行いました。



お子様を持つ親御様へのメッセージ

子どもの攻撃性と保育時間、さらに保育の質との関連性について米国での研究を紹介します。

研究室訪問



教育実習の経験から教員を目指し、情報工学と制御工学を専攻することでICTの重要性について体験を交えて説かれます。

岡本 尚志

私の本棚より

園児の好きな「うんち」のお話から感動を、英語の初心者にはジャックとアニーの冒険物語をどうぞ。

中里 菜穂子 金 ミンジ

聖徳大学児童学研究所主催 第13回 子どもの発達シンポジウムのご報告

平成最後の「子どもの発達シンポジウム」を2月16日(土)、聖徳大学1号館で「特別な支援(配慮)を必要とする子どもたちにどう向き合うか～様々な立場からの提言～」というテーマの下に、3人の講師をお招きして開催しました。

柏木明子さんは、メチルマロン酸血症という先天性代謝異常症をもつお子さんとの経験から、「病気をもちながら地域で幸せに生きるために」と題して、お子さんが自己管理していくための「相談力」をどのように育てていくかについて提言くださいました。



神山忠さんは、ディスレクシア(読字障害)という困難をもちながら、自衛官から特別支援教育者に転じたご自身の経験を語ってくださいました。私たちが何気なくメモす

る「たいことばち」が「太鼓とバチ」ではなく「鯛言葉血」に見えてしまう事など、たくさんの気付きを与えて下さるとともに、最新のテクノロジーによる「学習障害(限局性学習症)の子どもたちへの支援」のあり方を提言してくださいました。

中村みちるさんは、小児科医から少年院の医務官に転じた経験について、「君も立ちなおれる～少年院の、ハンディを背負った子ども達とともに～」と題してお話くださいました。現在の少年院の入所者は、単純な非行少年ではなく、家庭的・資質的(被虐待体験・精神疾患)ハンディをもった子ども達であり、刑罰を与えるのではなく「立ち直るための」正しい価値基準や自分の存在意義を知らせることが重要であると伝えてくださいました。

最後の全体討論も、50名を超える聴衆との熱気あふれるものとなりました。

(児童学研究所長 原田 正平 記)

児童学について考える

学びの共同体

～昔はみんな子どもだった、
だからすべての人が繋がれる～

大成 哲雄
原田 正平
甲斐 聡

児童学部長
児童学研究所長
児童学研究所准教授



対談シリーズ「児童学について考える」の第4回目は児童学部長の大成哲雄教授との対談です。今回は大成教授の専門のアートやさまざまな外部団体との連携、地域活動という観点から見た児童学の可能性についてお話いただきます。

原田:早速、これまでの対談を振り返りつつ進めたいのですが、児童研だより第57号では、大学院児童学研究科長の小野瀬雅人教授から、児童学はさまざまな専門領域が学際的、学融的に駆け込んだ領域の枠にとられない学問であるとお話しいただきました。加えて聖徳には各々の研究者が繋がる土壌がすでにあることが児童学部、大学院等の学びからもわかるというお話でした。第58号では、保育の長年の実践・研究者である児童学部の塩美佐枝教授に、「保育の聖徳®」の由縁と児童学は実践的研究であり、現場で研究が成り立つという話をいただきました。第59号では、児童学部児童学科長(夜間主)東原文子教授に、現場(附属小学校)と大学の連携、すべての場面が研究であり教育であること、また聖徳にはそういう環境があるのが魅力という話をいただきました。

原田:大成教授のご専門と子どもへの関わりについて教えてください。

大成:もともとは、東京藝術大学で絵画を学んでいましたが、教育系の大学で授業を持つ機会が増えてきて、小学校、中学校の美術教育に関わり勉強するうちに、おもしろいと感じるようになったのがきっかけです。



大成 哲雄 児童学部長

原田:先生のライフワークのひとつでもある毎年7月に開催されるアートパークの最初の狙いについてお聞かせください。

大成:平成20年に、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業(社会連携研究推進事業)の一環で、学生の地域貢献

活動を目的として始めました。大学の周りを見た時に「松戸中央公園は子どもが遊んでないじゃないか」と、身近な地域で課題を見つけ、ここで思いっきり遊べる体験を創って、子どもたちが公園に戻ってくるきっかけづくりになれば良いなという想いからスタートしました。地域の方に公園の様子を聞いたところ、昔は子どもがよく遊んでいた。しかし、テレビゲームや塾通いなどを要因として、子どもが外で遊ぶことが少なくなっている。その解決策をアートパークで、しかも学生の地域貢献だけが目的ではなく、地域

の人たちと一緒に考えていく事が出来ないか、そこが始まりでした。

原田:地域の方たちとはどのような連携をされたのですか。

大成:子育て支援のNPO団体やまちづくりに取り込まれている市民、松戸市、児童館等にお声がけをして運営スタッフになってもらいました。11年の間に地域の保育園が入り、千葉大学園芸学部の研究室、松戸市内の中学校の美術部、本学の保育科と児童学科のゼミ等ですね。

実際やり始めるとアートパークって、楽しいイベントという部分がクローズアップされますが、この準備に意味があり、実はそこに新しい研究の形があるんじゃないかとずっと思っています。アートパークを一言で言うと『学びの共同体』。大学だけでなく地域の人たちや子ども、学生がこのアートパークを核にそれぞれが学んで成長していると思います。

原田:今年は参加者が2,000名を超えたそうですね。最初の頃はどのくらいの人数だったのですか？

大成:80名くらいでしたね。6回目から1,000名を超えました。

原田:地域の方も楽しみにしてくれるようになったのでしょうか。

大成:そうなんです。リピーターも多く、普段幼稚園や保育園でなかなかできないことをやろうと私たちも思っているので、それに賛同してくれる保護者の方がたくさんいらっしゃるということですよ。普段は、家に持ち帰ってくる幼稚園や保育園でつくった作品を通して、子どもの様子を想像するにとどまると思っています。アートパークに親子で参加することで、「うちの子、こんな顔してつくっていたんだ」ということを親御さんが発見して、それがすごく面白いみたいで、「こんな表情見たことない」っていうんですよ。だとしたら、こうい



左:原田 正平 児童学研究所長 右:甲斐 聡 児童学研究所准教授



うアート活動に意味があると親御さんたちも感じて、保護者の方も実は学んでいる、そういう感じがしますね。

原田:一年を通して公園に子どもたちや保護者、地域の方が来てくれるように発展したら、素晴らしいですね。

大成:アートパーク以外でも地域と連携して活動しています。例えば、私のゼミはアートパークに参加している保育園へ秋学期に毎週行かせていただき、学生が考えたワークショップを実践しています。3～4年前から一緒に活動している千葉大学園芸学部の研究室は、公園をどうデザインするかを勉強しているのですが、専門が違うからこそ実は一緒に組めると思うんです。聖徳の学生は子どものことがわかっているの、公園遊びを実際にやってみたり、あと千葉大学の学生から「ちょっと教えて」と頼まれ、教えに行ったこともあります。そういう持ちつ持たれつのお互いに行っている、ちょっとおもしろい研究会みたいになっているんでしょう。

原田:学内だけで溶け合うのではなく、地域や他大学とも溶け合うことにより、幅広く活動できるということですね。

美術教育という先生の専門分野から考える「児童学の可能性、発展の方向性」、子どもの絵画の可能性についてはいかがですか？

大成:今、幼児教育でしたら、「レジジョ・エミリア」が日本で紹介されたというのは大きいと思うんですよね。

原田:それはどういったものですか？

大成:プロジェクト型の保育なんです。そこに「アート」を取り入れ、イタリアの小さな街のレジジョ・エミリアというところが、幼児教育を市をあげて取り組んでいるんです。その保育内容は特別決まったプログラムがあるのではなく、その中の一つにプロジェクト型というのがあって、アトリエスタというアートの専門家とペタゴジスタという教育学の専門家、両方の人が保育士とは別に専門でいて、そういう人たちが指導を行い、子どもたちから出てきたものを活動に繋げていくんです。

原田:今年度、学部教育で、今までバラバラだった児童福祉学、児童保健学、児童心理学、児童社会学、児童教育学を1年生の対象科目として春学期に児童学概論、それを発展させ秋学期に児童学演習という形で、それぞれの専門分野の連携・融合が始まったのですが、児童学部としての今後の方針は？

大成:ディプロマポリシーにも、各分野が連続性を持ち、児童学を基礎に7つのコースの学びがあると冒頭に書いてあるんですね。児童学部の場合は、児童学をどうとらえるか、またその探求は大事であると改めて思うんですね。

原田:私は児童保健学を担当していますが、私たち教員が教えるべきことは何か、それが他の専門領域とどう連携するか。講義と演習がありますから、大変面白いと思います。例えば、母子健康手帳を読みこんで、どう学べるか。概論や演習を通して、本当に実用に足る母子健康

手帳を使って、学べる、楽しめるみたいなことができれば。その中で児童学、聖徳独自の児童学が芽吹いたらと思います。



大成:1年生でこの科目が入っているのはすごく重要で、概論、演習そして全体を俯瞰して見るというか、それが3年次ゼミとか卒業研究に繋がり専門性が深まる、良い種を撒いている、そんな感じの役割の部分ですね。

また実際に、誰もが使う可能性があって、自分たちが授業で考えたようなことが生きる、そういう場面がもしあれば、社会に繋がる重要な一歩になると思うんです。

どんな大人だって、絶対子どもだった時期がありました。誰もが意味、研究者や評論家になれる。自分を手掛かりに、子どものことを語れるはずなんです。いわゆる大学の研究者だけで完結するのではなく、いろんな人たち、地域も含め、子どものことを考えていきたいですね。

他の分野は、興味がなければ参加できない。でも、誰もがみんな絶対子どもだった。すべての人が絶対繋がるはずなんです。そこに児童学の可能性があると思うんです。

甲斐:加えて児童学の学びの延長線で、出口(キャリア教育)の問題も各々の専門家が具体的なイメージを見せていくとキャリア教育のきっかけになるんでしょうね。

原田:今回は大成先生に美術教育、学部長の立場から、お話しいただきました。ありがとうございました。



☆「アートパーク」は、聖徳大学が主催し、同短期大学や千葉大学・松戸市内の団体・松戸市役所など、大学・地域・行政が連携して開催するアートプロジェクトです。松戸中央公園を舞台に、大学と地域の保育所や子育てサポートのNPOなどの団体が協力して、公園の新たな活用方法や外遊びの大切さを提案し、絵の具やダンボールなどを使ったアートイベントを開催しています。普段、学校や公園での遊びでは体験できないような思いっきり遊ぶ体験を通して、子どもたちの創造性を育む企画を実施、場所や活動の記憶を残し、地域のつながりも創出しています。

▼松戸市HPより

<https://www.city.matsudo.chiba.jp/miryoku/kankoumiryokubunka/rekisi-bunka/bunka/art/kurashinogeijutsu/artpark.html>

▼アートパークプロジェクト
<https://artpark.exblog.jp/>

(川口 一美 記)



子どもと法
⑥

子どもをタバコから守る法律

— 未成年者喫煙禁止法と受動喫煙防止 —

聖徳大学児童学研究所長 原田 正平

日本には100年以上前から子どもをタバコから守る法律があり、世の中の大人たちがその法律をしっかりと守っていれば、日本は世界最初の無煙国家 (Smoke-free country or Tobacco-free country) になれたはずでした。その法律は、「未成年者喫煙禁止法(1900年施行)」であり、その法律の制定を主導されたのは茨城県選出の根本正代議員でした。根本氏は未成年者飲酒禁止法制定や義務教育無償化にも尽力した方です。

逆に、そうした法律があったため、長い間日本では、未成年者の全国的な喫煙率調査は行われませんでした。しかし、教育現場からは小中学生の喫煙問題が取り上げられ、「禁煙教育の手引」(学事出版、1985年)といった本も出版されています。

その後、1990年度に初めて行われた全国調査によると、中高生57,189名から回答が得られ、男子中学1年生の約4分の1が喫煙を経験し、高校3年生では約2分の1に達していました。女子では中学1年生で約9%、高校3年生で約17%が経験者でした。

しかし、未成年者喫煙禁止法では、「第一条 満二十年ニ至ラサル者ハ煙草ヲ喫スルコトヲ得ス/第二条 前条ニ違反シタル者アルトキハ行政ノ処分ヲ以テ喫煙ノ為ニ所持スル煙草及器具ヲ没収ス」とあるだけで、未成年者に対する直接的な罰則はなく、不良行為少年として補導の対象となるだけでした。

状況が一変したのは、2001年に同法が改正され、「第四条 煙草又ハ器具ヲ販売スル者ハ満二十年ニ至ラザル者ノ喫煙ノ防止ニ資スル為年齢ノ確認其ノ他ノ必要ナル措置ヲ講ズルモノトス」という条文が加えられたためです。そのため、親権者等の不制止(第3条)と営業者の知情販売(未成年者と知りながら販売)(第5条)の違反による送致者は2012年に1,480人に達しました。

日本では、こうした変化がなぜおこったかについて、きちんと報道されることがありませんが、実は世界では「たばこの規制に関する世界保健機関枠組条約」という公衆衛生領域では初の国際条約が作られ、2005年2月27日に発効しています。正式名称はWHO Framework Convention on Tobacco Controlですが、略称FCTCとして、どの国の人でも理解できる有名な条約です。しかし、皆さんの多くは知らないかもしれません。

でも「健康増進法」(2003年5月施行)やその第25条「学校、体育館、病院、劇場、観覧場、集会場、展示場、百貨店、事務所、官公庁施設、飲食店その他の多数の者が利用する施設を管理する者は、これらを利用する者について、受動喫

煙(室内又はこれに準ずる環境において、他人のたばこの煙を吸わされることをいう。)を防止するために必要な措置を講ずるように努めなければならない。」いわゆる「受動喫煙防止条項」は知っていることでしょう。

2018年2月10日に行った、児童学研究所主催の第12回子どもの発達シンポジウムのテーマは、「2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、タバコのない社会で生きる健やかな世代を育てるために」であり、FCTCが健康増進法第25条の根拠であること、東京都がより先進的な「東京都子どもを受動喫煙から守る条例」を制定したこと(2018年4月1日施行)などが取り上げられました。

この都条例の成立に尽力された、弁護士でもある岡本光樹都議会議員は、「受動喫煙は、児童虐待や暴行罪・傷害罪(生命・身体犯の類型)の問題として議論されるべきであると考えています(『捜査研究』2016年3月号「タバコ受動喫煙と刑法 事例別Q&A」62頁)。子供の生命および健康を受動喫煙の悪影響から保護し、子供が安心して暮らせる環境を整備することは、社会全体の責務であると考えます(条例案の前文及び第1条)」とまで言われています(<https://ironna.jp/article/7826>)。

そうした背景があって、都条例には以下のような条文が含まれています。

第3条 都民は、受動喫煙による健康への悪影響に関する理解を深めるとともに、いかなる場所においても、子どもに受動喫煙をさせることのないよう努めなければならない。

第6条 保護者は、家庭等において、子どもの受動喫煙防止に努めなければならない。

2 喫煙をしようとする者は、家庭等において、子どもと同室の空間で喫煙をしないよう努めなければならない。

さらには第7条では「家庭等の外における受動喫煙防止」、第8条「自動車内における喫煙制限」、第9条「公園等における受動喫煙防止」、第10条「学校等周辺の受動喫煙防止」、第11条「小児医療施設周辺の受動喫煙防止」と続きます。

字数が限られているため、詳細は省きますが、国の「健康増進法の一部を改正する法律案」が不十分ということで、東京都受動喫煙防止条例の中に「(保護者の責務) 第五条 保護者は、いかなる場所においても、その監督保護に係る二十歳未満の者に対し、受動喫煙による健康への悪影響を未然に防止するよう努めなければならない。」という子どもを守る条項が入れられたことを最後にお伝えします。他の道府県も東京都にならうことを願っています。



子どもの周囲は禁煙に!

日本小児科学会・日本小児保健協会・日本小児科医会





集団あそび中における視線の動きについて

—3歳以上児を対象に—

聖徳大学大学院 児童学専攻 児童学専攻 博士前期課程修了
菊地 一晴

はじめに

子どもたちが自由に遊んでいる様子を観察していると、友だちをよく見る子ども、モノをよく見る子どもなど興味の先や視線の動きに特徴があることが分かります。さらに観察を続けると、特に障害があるとは認められないにもかかわらず、モノに視線を向けたまま会話をしたり、顔は相手の方に向けていても、視線は相手の目ではなく別の箇所を見ながら会話をしている様子を見かけることがあります。つまり、会話中に相手の目を見ない子どもがいる可能性があるということになります。

相手と目を合わせて意識を共有したり情動を感じ取るとは、社会性の発達のひとつと考えられます。「友だちと目を合わせないことと交友関係には関連があるのだろうか」という疑問から私の研究は始まりました。

研究1 子どもの視線についての保育者の認識

〈目的と方法〉会話中に相手の目を見ないことがある子どもの存在を明らかにするために、子どもの視線について、保育者へ半構造化面接を行いました。

〈調査対象〉3歳以上児を担当している保育者18名。

〈結果と考察〉

「子ども同士で話をしている最中の視線について、何か気になることはありますか？それとも特にありませんか？」という質問に対し、18名中13名の保育者から「会話をしている際、目が合わないことがある」という趣旨の回答がありました。その13名にいくつかの追加質問を行いました。まず「目を見て話をしないことがある子どもは、どのくらいいますか？」という質問を行い、目を見ない子どもが1クラス平均4名いることが分かりました。次に「目を見ないことがある子どもの特徴は？」という質問を行い、「一方的に話す」、「互いの会話がつながりにくい」、「落ち着きがない」といった回答がありました。

面接では、相手の目を見て会話をしている子どもの特徴についても回答を得ました。その結果、「リーダー性がある」、「自分がやるべきことが分かっている」、「言わなくても次の行動がとれる」といった、周囲の状況観察や自身の役割理解ができている趣旨の回答がありました。

研究2 子どもの視線の特性と社会性の関係

〈目的と方法〉ビデオ撮影を行い、子どもの注視先と行動について検討しました。会話中の注視先を「モノ」、「顔・目」、「逸視」と設定し、会話がなかった場合の注視先はおもに「自操(自分の遊んでいる手先など)」、「他操(他児の遊びを見ている)」のカテゴリを設定し、それぞれの注視時間を測定しました。

〈分析対象〉研究1で挙げられた「会話中に目を見ないことがある子ども」7名と「目を見て会話をしている子ども」4名の合計11名。

〈結果と考察〉

対象児ごとに注視方向の合計を図1として示します。観察の結果、会話中に相手の目を見ない子どもGb、Hb、Fb、Kb、Eg、Db、Bgと、相手の目を見て会話をしている子どもJb、Ib、Ab、Cgは、半構造化面接での保育者の報告と一致していました。研究のなかで7名を「逸視児」、4名を「非逸視児」と定義しました。非逸視児は逸視児と比較すると「会話あり」の時間が長く、友だちと言葉を交わしながら遊ぶことを好む傾向がみられました。逸視児は、「会話なし自操」と「会話なし他操」の割合が高く、1人で遊ぶ時間が長いことが示されました。

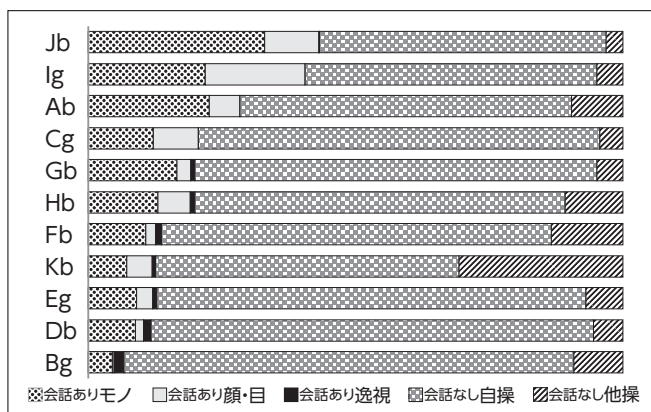


図1 対象児別 1年間の注視方向の割合

総合考察

人それぞれ顔の形が異なるように、視線にも個人差があることが分かりました。そして、自由遊びの場面での視線方向と他者との関わりに、関連性があることが示唆されました。友だちと遊ぶことを社会性とするのであれば、非逸視児は社会性が高く逸視児は社会性が低いということになります。しかし、縦断的に観察を進めるなかで、友だちとの関係性が変化することで注視先が変化していく様子もみられました。子どもの家庭環境や友だち関係といった外的要因の変化が、幼児期の子どもの視線に影響がある可能性が示唆されました。

おわりに

今回は3歳以上児を対象として研究を進めました。日常的な言語コミュニケーションが成立している幼児を観察することで、会話中の視線の動きについて分析することができました。今後は、乳児期からの視線の動きを検討していきたいと考えています。言語発達が未熟な乳児は、他者と関わる際、幼児よりも視線を使用していることが推察されます。乳児は空腹時と痛みの訴えでは泣き声の性質に違いがあると言われるように、自分の要求を伝える際の視線や快適な気分をあらわす視線など、視線にも違いがあることが考えられます。乳幼児の視線と発達の関係について、これからも検討を重ねていきたいと思えます。



活動レポート

第54回聖徳祭 児童学研究所・保健センター合同企画

「子どもから大人までの健康増進～児童学専門家のアドバイス」

聖徳大学児童学研究所長 原田 正平

2017年の聖徳祭では、児童学研究所の22年間を振り返った展示をさせていただきましたが、2018年11月17日、18日の第54回聖徳祭では、児童学研究所と保健センター合同企画によるそれぞれの活動内容の展示と、初めての試みとして、児童学専門家(小児科医)による「健康相談」も行いました。

児童学研究所としては、1) 2017 / 18年の2回の講演会・第12回子どもの発達シンポジウムのポスター、2) 児童研だより「児童学について考える」3回分の対談内容のポスター、3) 児童研だよりで紹介した「お勧めの本」9冊を、紹介ページのポスターと一緒に展示しました。

その9冊は、「地球のかたちを哲学する(ギヨーム・デュブル作)」、「世界がもし100人の村だったら(池田香代子再話)」、「聲の形(大今良時作)」、「リリコは眠れない(高樓方子作)」、「マチルダはちいさな天才(ロアルド・ダール作)」、「どーこだどこだ(カズコ G・ストーン作)」、「さっちゃんのまほうのて(たばたせいいち他、作)」、「からすのパンやさん(かこさとし作)」、「花さき山(斎藤隆介作・滝平二郎絵)」でしたが、会場にいらした方に対する

アンケート結果では最も好評な展示でした。

また、保健センターは、1)「知ってる？保健センターの歴史」、2)「養護教諭って知ってる？」のポスターを作成し、展示しました。

児童学研究所と保健センターには、児童学専門家(小児科医)が所属していますので、地域貢献の観点から、「子どもから大人までの健康増進」と題した健康相談を試みました。会場に質問箱を設置し、時間帯を決めての講話形式による回答を準備しましたが、お子さんに関する質問はなく、会場に直接来られた成人何名かに、タバコの有害性やご自身の健康問題についての助言をさせて頂きました。次年度は、健康相談実施について、事前により分かりやすく周辺自治体に広報したり、当日の大学構内での案内を工夫するなど、地域貢献の実を上げていきたいと考えています。



保健室

お子様を持つ親御様へのメッセージ

聖徳大学保健センター所長 宮川 三平



現在、子育てに奮闘中の保護者の皆様、日頃のお子様に対する愛しみ、ご努力に心より敬意を表したいと思います。

さて、今回、第54回聖徳祭において、児童学研究所と保健センター所属の児童学の専門家(小児科医)が健康相談をする、という新しい試みを行いましたので、そこで十分お話しできなかった、保護者の皆様にご紹介したい新しい研究成果を取り上げてみました。それは、NICHD(National Institute of Child Health and Human Development: 米国子ども健康・発達国立研究所)によって1990年から開始され現在も継続中の縦断的研究の成果ですが、大変興味深い結果です。

まず子どもの健やかな発達に最も影響を及ぼすのは、保護者や家庭の要因(保護者による情緒的に多くのサポートがある、家庭が知的に刺激的な環境である、母親が精神的に健康であるなど)であることが明らかとなりました。この結果は、保護者の皆様も納得されるのでは

ないかと思います。子どもたちの環境で最も大切なのが、家庭であるからです。

一方心配なこともわかりました。それは、保育時間と子ども達の攻撃性との関係です。4歳半での結果では、保育時間が長い(週30時間以上)子どもは、攻撃性が多くなりました。さらに、15歳での結果でも、保育時間が長い(週30時間以上)子どもは、リスクを冒す行動、衝動性などが多く認められました。幸い、「質の高い保育」*1は、4歳半から15歳まで攻撃性を少なくするという結果が得られました。英国で行われた研究でも同様の結果でした。保育は、欧米と日本では若干異なりますので、日本の子どもたちでの検証が待ち望まれます。

*1 質の高い保育とは？

- ・ポジティブな態度を示す・ポジティブな身体接触をする
- ・子どもの発声や発語に応答する・子どもに質問する
- ・その他の働きかけをする(ほめる、学びの助けをする、お話を語る、歌をうたってあげる)
- ・発達をうながす
- ・社会的な行動の推奨・読む力を伸ばす
- ・否定的なかわりを回避する



研究室訪問 #23

聖徳大学児童学部児童学科
准教授

岡本 尚志 研究室



第23回は、制御工学と情報工学を専門に研究されている児童学部児童学科の岡本尚志准教授です。

■先生の専門の研究についてご紹介ください。

私の専門は制御工学と情報工学です。制御工学は物を動かす、あるいは目標にあったように進めていく、考えていくというものです。情報工学はソフトウェア、ハードウェア、ネットワーク、セキュリティ等あらゆる分野がありまして、それらを使って制御していくということが私の専門のテーマです。例えば、この部屋の中に空調があるとします。ある特定の温度が設定された場合、部屋全体を均一に、かつ、設定温度にするために、短時間でノズルの吹き出し方や吹き出し温度を計算しなければならない。そのためにはどうすればよいかということを考えるのがコンピューターであって、実際に動かすのは制御となります。

■研究や将来の方向を決めたきっかけは？

私は小さい頃からものづくりが好きで、ラジオやラジオンを作っていました。大人になってからコンピューターを分解、組み立てることを個人的にやっていました。ちょうど小学校時代にメカトロニクスという言葉が流行り始めた時代で、電気仕掛けのロボットが流行った時代だったのです。そういった背景も後押ししたのではないかなと思います。

教員を実際の職業としたきっかけは高校の教育実習です。クラスからもらった色紙に「先生のおかげで大嫌いな数学が嫌いぐらいになりました。ありがとうございました。」と書いてありました。たった2週間の教育実習で変わるなら、半年ないし1年続けたら好きになっているかもしれない。そう考えた時に「教員って面白い仕事だな」と思いました。

■学問としての魅力は？

制御工学の面白いところは、目的を達成するために試行錯誤するところです。例えば、車型のロボットをパソコンでプログラミングして、迷路の中でぶつからずに抜けられるかということをやっています。その時にプログラムをどうやって組んだら良いか、失敗したらどこを直したら良いのかを考えていくことが面白いところです。

最近では震災、災害用ロボットが話題になりましたし、小学校ではプログラミング的思考が導入され、子どもた

ちにはプログラミングという言葉がだいぶ浸透してきています。昨年、八潮こども夢大学というイベントで、お互いに初めて会った小学生たちに、3人のチームになってプログラミングをしてもらいました。その時の子どもたちの目がすごく輝いていて、参加した子どもたちや保護者からは、全く知らない人同士でも一緒にある物事に取り組めるというコメントもいただきました。「工学」とついてはいますが、単純に工学的な技術を学ぶだけではなくて、人間関係やコミュニケーションも学べる良い学問であると思っています。

■この先の夢は？

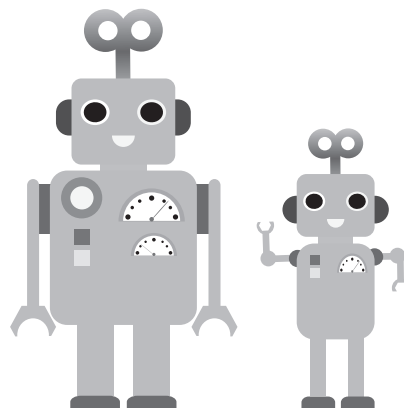
まずはICT(情報通信技術)に興味をもってほしい、そのきっかけを与えられれば良いと思っています。特に子どもたちは、ゲームが大好きですが、ゲームを作ってみようと思う人はその中のひとにぎりだと思います。そのきっかけを与えるなり、環境を整えてあげることは大人の仕事かなと思います。

■最後に先生方に向けてメッセージをお願いします。

先生がICTやプログラミングというものを面白い、楽しいと感じなければ子どもたちにも伝わらないと思います。まず、先入観を持たないことだと思います。触れてみないとその楽しさや面白さが分からないと思うので、まずは試してほしいのです。

私は高校の教科書を執筆していて、高校生にその内容が分かりやすく、かつ、面白いと思えるような教科書にしよう日々努力をしています。そして、幼小中の子どもたちが興味を持つような教材やツールを考えて、最後に高校の内容に結びつけることを考えています。これらを実際に現場で使っていただき、その善し悪しを現場の方からあげていただきたいのです。子どもたちの育成に大学の教員も一緒に取り組むことが必要なのではないかと思っています。

(腰川 一恵 記)



私の本棚より

Magic Tree House (マジック・ツリーハウス)

Mary Pope Osborne著、Sal Murdocca絵
Random House Books for Young Readers

このMagic Tree Houseのシリーズは、ジャックとアニーという2人の兄妹が、時空を超えて世界中の様々な場所や時代に行く冒険物語です。

アメリカでは、小学校低学年から10代前半までの子どもたちに25年以上読まれ続けているベストセラーです。日本語にも翻訳され、2011年度にはアニメ映画化されています。現在は、英語版の公式ウェブサイトから、Magic Tree House Passportをダウンロードすることができて、読んだ本に関する質問に3つ正解すると、その本のスタンプをダウンロードしてパスポートに貼ることができるようになっており、それも楽しみの一つになっています。

また、一話完結で、28巻までは1冊5,000～6,000語で文字も大きく、イラストもかわいいので、英語学習初心者にも気軽に読めると思います。29巻以上になると難易度が徐々に増しますが、理科や社会科の知識も得られるので、英語以外の分野に関する学べます。

作者によると主人公のジャックの一番好きな国は日本とこのことですので、そのあたりも読むきっかけになると思います。



聖徳大学
語学教育センター
准教授 中里 菜穂子

こいぬのうんち

クォン・ジョンセン著 チョン・スンガク絵 ピョン・キジャ訳
平凡社

「うんち」という言葉には、何故か笑いが込み上げる魔法のような力があります。しかし、『こいぬのうんち』に出てくるうんちは、切なさや温かさを感じさせてくれます。

石垣の隅っこに残された子犬のうんちがすずめにつつかれる場面から始まる話は、誰にも必要とされず汚いものとされていたうんちが、たんぽぽと出会い土に還り、その花となるまでの話です。すずめや土くれ、ひよこたちに拒まれる場面では、友だちがいない寂しさを共感できるでしょう。さらに、たんぽぽに綺麗な花を咲かせるために自分を犠牲にするうんちの姿から感動が押し寄せるはずです。

うんちが土に還る循環の法則から、世界にある全てのモノにはその意味や価値があることをメッセージとして伝えてくれる一冊です。

日本の田舎の風景と似ているような親近感とともに、どこか違う韓国の情緒が感じられます。絵本を読み終えた時、心に余韻が残る内容は大人の方も十分楽しめ、心が温かくなるでしょう。



聖徳大学短期大学部
保育科
准教授 金 ミンジ

アンケートご協力をお願い

最後までお読みいただきありがとうございます。『児童研だより』No.60はいかがでしたか？パソコンまたは携帯から、どうぞ皆様のご意見をお寄せください。ご協力いただいた方には、オリジナルグッズをお送りいたします。

☆『児童研だより』アンケート入力フォーム専用ページ
<http://www.seitoku.ac.jp/chizai/kenkyujo/jidou/goiken/>

携帯電話の方はコチラ



ホームページのご案内

聖徳大学児童学研究所ホームページでは、最新のイベント情報の配信や『児童研だより』のバックナンバーがご覧いただけます。



<検索方法>
検索サイトで「聖徳大学」と入力して検索してください。

>>>>

聖徳大学 (<http://www.seitoku.jp/univ/>)
のホームページの下段にあります、
「児童学研究所」リンクバナーを
クリックして、ご覧ください。

